

私はフィルムが全て終わるまで、カメラで去ってゆく子ども達の姿を写し、ビデオの電池もすっかり終わってしまいました。既に3時を廻り、私もまた疲れ果ててしまいました。この日の天気は余りよいとは言えず、風も強くて埃っぽく、見通しもよくありません。けれども一緒に歩き写した写真は真実の姿です。この地の人でなければ想像もできないでしょう。

その夜は劉家山村に宿泊を予定しており、折りよく劉家山村に行くロバ車が通りかかりました。親切な若者は私を乗せてくれたばかりか大きな林檎をくれました。その爽やかな甘酸っぱい林檎を一口齧ってみて、私は朝の9時からこの時間まで何も食べたり飲んだりしていなかったことに気づいたのでした。

二ヵ月後の2003年4月30日、私は再び伏羲河村を訪れました。次の日は労働節なので子ども達はきっと学校から村に戻ると確信して、私は捷路砭で待ち受けていました。

一番最初に捷路砭に現れたのは延峰で、続いて慶慶、芳芳と向麗です。延峰の理想は大きくなったら洋服のデザイナーになることで、きれいな衣服を沢山デザインしたいそうです。慶慶は大学にいて体育の先生になりたい。芳芳は画家になりたいとのこと。向麗も私がずっと撮影をしてきた子どもですが、向麗はまだ幼くて大きな子ども達と一緒に歩いて学校に行く力が十分でないと判断したお父さんが娘を郷の親戚の家に預けていたので、通学の折は彼女はいませんでした。

伏羲河の子ども達は私のここでの仕事が間もなく終わり南に帰ることを知っていて河の砂洲に行き遊ぼうといいました。

砂洲は勿論黄河の砂州で、伏羲河村は三面を水で囲まれており、黄河の水は伏羲河村の辺りに来ると渦を巻き、大波を沸き立たせ、大量の砂や泥を巻き込んで下流へ流れて行きます。砂洲には彩り鮮やかな、ガチョウの卵のようなさまざまな石が残され、河の中で光り輝いています。子ども達は靴が湿るのも構わず浅瀬の辺りでいろいろな小石を探し回りました。

暫くすると向麗がいくつかの石を手にとって来て好きなのがどれか訊くので私は二つ選びました。暫くすると慶慶が又いくつかを持ってやってきました。それで子ども達は私のために綺麗な石を拾っているのだと知りました。その時の気持ちをなんと形容したらよいのでしょうか。「小さいの、小さいのね。大きいのは持って帰れないから」と一生懸命言って彼女達に気づいて貰うよう



黄河に沿った通学路



黄河で石を拾う少女たち

努めました。大きいのを選ぶとしたらだれのを選べばいいでしょう。それに誰のが一番大きいかということにもなるでしょう。

2004年7月、私は再び土崗郷に行きました。土崗小学校を通り過ぎる時、中に入りたい誘惑を感じましたが思い止まりました。学校はもうお休みで子ども達は家に帰ってしまっているでしょうし、たった一年の間に学校の教室や設備、寝室が変わったとも思えません。子ども達は相変わらず次々とここに時間をかけて通って来でしょうし、卒業後は次々と県の中学に進学したり、自分の村や他所に出て仕事をするようになるでしょう。山里の子ども達はこのように生きてゆくの。彼女たちの父母や祖父母と同じように善良で純朴ですし、幼い頃から勤労の習慣や苦勞を耐え抜く精神を養っています。

《陝北女娃》の中の子ども達の今後はどのようなのでしょうか。彼女達の中で誰か自分の夢を実現するのでしょうか。何年かしたら、皆と会いたいものです。(完)

(2004年8月15日)